

「教学と現代11」第2回

第1講：曾山俊「ロシア/ウクライナ伝道の現在」

金子 昭

ロシア伝道のきっかけ

一般的な日本人にとって、ロシアには文学や芸術の国というイメージがあるが、ソ連のほうは日ソ不可侵条約を破棄し、日本の領土に侵攻して支配してきたこともあり、良い印象を持たれていない。しかし、そのソ連



【曾山俊氏】

は24年前の1991年に崩壊した。曾山俊・陸牧分教会前会長がロシアでの伝道を志したのは、このことがきっかけであった。

当時、金沢の港湾地域でもロシア人の姿をよく見かけた。実際に彼らと話をしてみると、長屋の熊さん・八つつあんのような感じで親しみを感じた。しかも人情深くて世話焼きでもある。

曾山氏は金沢刑務所で教誨師をしていたが、アウシュビッツで囚人の身代わりになったコルベ神父の話を講話の中ですることがあり、キリスト教の自己犠牲的な信仰信念に強く打たれていた。「宗教はアヘンなり」と70年間も無神論統制を続けてきたソ連が崩壊し、新生ロシアに生まれ変わった今こそ、教祖の御教えを広める絶好の機会であると、曾山氏の心は燃え立った。

しかし現地はまだ混乱をきわめており、危険も少なくなかった。曾山氏がロシアに布教伝道に行っている間、夫人は毎晩欠かさず「十二下り」のおつとめをつとめていたという。ロシアでは教誨師である経験を生かして、各地の刑務所で教誨講演を行った。これらの講演はいずれも飛び込みで直接交渉を行って許可を得たものである。

曾山氏がモットーとしたのは、見返りを求めない底無しの親切に徹するということだった。ロシア伝道のためにはロシア語を習得しなくてはならない。天理大学ロシア学科には、ウクライナ出身のイワン・ボンダレンコ助教授（当時）が教鞭を取っていたので、曾山氏はボンダレンコ氏からロシア語を習うことにし、それと共に故郷が困難な状況にある同氏のために種々尽力をした。

ボンダレンコ氏はやがて別席を運び、ようばくになった。同氏は現在、キエフ大学極東言語学部長の要職にある。

ロシアからウクライナへ

ロシアでは、2001年からサンクト・ペテルブルグのクレスティ刑務所で10年間ほど通い、教誨活動を行っていた。その間、2003年にはモスクワとサンクト・ペテルブルクで自教会メンバーによる雅楽と和太鼓の演奏会も実現した。

しかし、数次ビザの取得が難しくなったため、入国ビザの不要なウクライナへと布教伝道の変えることにした。ウクライナでも、何度も刑務所に足を運んで教誨講演の許可を得るこ

とができた。

刑務所では教誨講演だけではなく、希望者には控室に来てもらっておさづけを取り次いだ。また夜行列車で移動していた時、乗務員が切符をチェックしに来たが、曾山氏が「私は日本から来た聖職者だが、もし列車の中で急病人が出たら、“おすがり”をさせていただくので言ってほしい」と申し出たところ、自分にしてほしいと言うので、車掌室に行き、おさづけを取り次いだこともあった。このような体験から、ウクライナ人は祈りを真摯に受け入れてくれる民族であることを実感した。

ウクライナはスラブ民族の“本家筋”にあたり、ロシアのほう“分家筋”になる。分家のロシアによる70年間の共産主義体制を経た後も、ウクライナ人がもともと有していた信仰心は決して揺らいでいなかったのである。

信仰の「元一日」に立ち返って

ウクライナでの曾山氏の教誨活動も4年前にある出来事を契機に、いったん停止をすることになった。ジトミールという古都にある刑務所で、教誨講演の最中に原稿内容が突然頭の中から消えてしまい、原稿を見ようと鞆を持ってきてもらったが、今度は原稿用の眼鏡を忘れてしまったことに気が付いた。そうこうするうちに200人はいた聴講者の大半が退出してしまったのである。しかし、最前列の20人ほどが心配そうに残ってくれて、最後まで話を聞いてくれた。

曾山氏は、最後まで残ってくれた彼らこそ「元の理」で教えられる「めざる一匹」だと思って感激すると同時に、こういうことを見せられたのは、20年以上にわたるロシア語での講演活動の中で、いつのまにか自分が高慢になっていたことに対して、神様から戒めをいただいたからではないか、と深く反省することになった。そこで、教誨講演の活動は止めることにして、昔の天理教布教師のようにおさづけの取り次ぎを中心に据えた活動に専念することを決意し、現在に至っている。

曾山氏は幼い頃、湯船に落ちて難聴になったという。8歳のとき、当時教会長だった祖父から、「耳が聞こえにくいからといって、それは罰が当たったからではない。神様は魂に相応しい肉体を貸してくれている。だから音の世界で人々の役に立ちなさい」と言われた言葉が自分の信仰の「元一日」とであると述べた。音の世界での人助けということで、曾山氏は言葉(外国語)によるおたすけを志したのである。その「元一日」をかみしめながら、この講演の翌日もウクライナに向けて出発すると語った。

曾山氏は、刑務所での教誨の際、受刑者に「いまは人生の冬かもしれないが、やがて必ず春が訪れる」と諭しているという。最後に、ハーモニカで「春が来た」を演奏し、かつてのロシア国歌のメロディーによる自作の替え歌「あらきとうりょう賛歌」を披露した。



【最後にハーモニカを演奏】